

## 鳥取医療センターでの病院実務実習への取り組み

### —薬学 6 年制における長期実務実習へむけて—

國富留美<sup>1)\*</sup> 齋藤早苗<sup>1)</sup> 川崎元弘<sup>1)</sup> 山口智恵美<sup>1)</sup> 梶山宜之<sup>1)</sup> 毛利薫<sup>1)</sup>

1) 国立病院機構鳥取医療センター薬剤科

## Conduct of a clinical practicum in Tottori Medical Center

### - For a long term clinical practicum in six-year pharmaceutical universities -

Rumi Kunitomi<sup>1)\*</sup>, Sanae Saito<sup>1)</sup>, Motohiro Kawasaki<sup>1)</sup>, Chiemi Yamaguchi<sup>1)</sup>, Yoshiyuki Kajiyama<sup>1)</sup>,  
Kaoru Mouri<sup>1)</sup>

1) Department of Pharmacy, National Hospital Organization Tottori Medical Center

\*Correspondence: r-kunitomi@tottori-iryu.hosp.go.jp

#### 要旨

2006年4月より薬学教育は4年制から6年制へ変更となった。薬学6年制における実務実習は病院、薬局各10週間の長期実務実習であり、「実務実習モデル・コアカリキュラム」に基づいて行われる。2010年には6年制教育の長期実務実習が実施される予定で、現在は各施設で色々な取り組みが成されている。鳥取医療センター（当院）では、2007年6月に4年制教育での4週間の病院実習を受け、「実務実習モデル・コアカリキュラム」に基づいて実習項目を検討し、当院の実習カリキュラムを作成したが、「実務実習モデル・コアカリキュラム」の項目全てを実習することは不可能である。今回は、当院での実習不可能な項目の一部に関して、鳥取県立中央病院薬剤部、鳥取市立病院薬剤部の協力を得ることができ、薬学6年制における長期実務実習に、複数施設によるグループ実習という形を提案する。鳥取臨床科学 1(1), 1-6, 2008

#### Abstract

In April 2006, pharmaceutical universities in Japan modified course periods of the education program for undergraduates from four years to six years. In the six-year pharmaceutical universities, clinical rotation that is based on “Model Core Curriculum of Clinical Practicum” is supposed to be conducted for ten weeks each in a hospital and a pharmacy. Since such a long-term clinical practicum will be conducted in 2010, a wide variety of training programs have been considered in many clinical institutions. As a four-week practicum in the four-year pharmaceutical universities has been performed since June 2007 in the Tottori Medical Center, we designed a curriculum for the training, based on “Model Core Curriculum of Clinical Practicum” for preparing the forthcoming long-term practicum in the near future. However, it is impossible to consume all the subjects in the curriculum only in our hospital. This time, we made it possible to pursue the subjects that are difficult to be trained in our hospital in cooperation with the pharmacies at the Tottori Prefectural Central Hospital and the Tottori City Hospital. As a result, we propose, for the forthcoming long-term practicum for undergraduates in the six-year pharmaceutical universities, a group training in cooperation with several local clinical facilities,

because it is absolutely impossible for a single clinical facility to complete all the subjects in “Model Core Curriculum of Clinical Practicum” made for the long-term practicum. *Tottori J. Clin. Res.* 1(1), 1-6, 2008

Key Words: 病院実務実習, 薬学 6 年制, グループ実習; clinical practicum in hospital, six-year pharmaceutical university education, group training

## はじめに

2004 年に「学校教育法等の一部を改正する法律」、さらには「薬剤師法の一部を改正する法律」が成立し、2006 年4月より薬学 6 年制の実現に至っている。薬学 6 年制では、病院及び薬局での実務実習はそれぞれ 2.5 ヶ月の長期実習となり、2010 年から開始される。

現在、各施設において薬学 6 年制の長期実務実習の受け入れにむけて、様々な取り組みが行われている。鳥取医療センター（当院）は、精神、重症心身障害者（児）、神経難病、結核を含む呼吸器医療の分野において地域に貢献できる医療の提供を目指している約 500 床を有する病院である。当院は内科、神経内科、精神科、小児科と診療科が限定され、採用薬も偏っており、また薬剤科は薬剤師 6 名の勤務体制のため、学生実習の受け入れは難しいと考えていた。しかし、当院での実習を強く希望した薬学生がいるとのことで、4 週間の病院実習を受けることとなった。

## 実習の進め方について

当院では 2005 年 7 月に 2 病院が統合して開院して以降、学生実習受け入れの経験がなかったため、まず「実務実習モデル・コアカリキュラム」の項目毎に担当者を決めることから始めた。表 1 に「実務実習モデル・コアカリキュラム」の項目毎の担当者を示す。下線部分の“注射剤（高カロリー輸液など）の混合操作を実施できる”、“特別な注意を要する注射剤（抗悪性腫瘍薬など）について説明できる”、“無菌製剤の必要性を理解し以下にあげる製剤のいずれかを調整できる（点眼剤、注射剤など）”、“薬物モニタリング”、“中毒医療への貢献”は、当院では実習不可能な項目となる（注：当院は抗

悪性腫瘍薬の採用薬がない）。このため、注射剤の混合操作に関しては鳥取県立中央病院薬剤部へ、薬物モニタリングに関しては鳥取市立病院薬剤部へ指導を依頼することとした。

## 院内での実習について

「実務実習モデル・コアカリキュラム」の(1)～(3)、(6)の項目は薬剤科内で各担当者が指導を行った。調剤業務の実習については、当院は神経内科、精神科、重心医療が中心であり、散剤調剤や粉砕調剤が多いため、日常業務の中で処方箋に基づき指導を行った。(4)の項目は、薬剤科内、及び病棟へ出向き、各担当者が指導を行った。以下に実習内容を紹介する。

精神科病棟では服薬指導やカンファレンスの指導と見学を行った。学生が精神科病棟に実習へ行く前に、「バーチャルハルシネーション」で統合失調症の急性期に見られる幻覚症状の疑似体験を行った（図 1）。結核病棟ではサージカルマスクを着用しての陰圧の結核病床の見学と、結核患者の DOTS (directly observed treatment, short course: 直接監視下短期化学療法) について説明を行い、結核患者と家族、保健師、主治医、看護師、薬剤師による DOTS カンファレンスの見学を行った。治験業務については、治験管理室業務や CRC 業務全般の説明を行うとともに、CRC (clinical research coordinator) に同行し診察を見学した。また当院では、神経内科医師、言語聴覚士、放射線技師により摂食・嚥下動態の評価法の 1 つである VF 検査 (videofluorography) を行っており、検査方法や検査目的等説明を受け、その様子を見学した（図 2）。他に、NST (nutrition support team) 委員会主催の勉強会への参加や NST 回診にも同行した。